

海外で働くつもりで働く

2023・11・9 重枝 一郎

「グローバル人材」という言葉をよく聞く。生徒たちの“これから”にも関係ありそうな言葉でもある。教育は社会情勢によって変化するので、この「グローバル人材」という言葉を理解する必要がある。

「グローバル人材」という言葉は、「グローバル化」という言葉から生まれている。「グローバル化」は、20世紀後半から国際的な自由競争や規制緩和の推進を背景に進展して、昨今ではインターネットの普及によりさらに進展が加速している。となると、「グローバルに活躍するためには」という生徒の学びが当然出てくる（以前も話したと思うが社会の変化が教育をつくるので）。このことを私たち教師は、何か英語力を高めることがグローバル人材育成と短絡的に思っていないだろうか。

そこで大切となるのは、グローバル人材が兼ね備えている資質・能力を定義することである。おもしろいデータを見た。海外で働く日本人に対する、現地従業員からの評価で、「海外で働く日本人の評価が低い項目」に着目すると、低かった項目は、「現地語を熱心に勉強する」「現地の商習慣を理解する」「現地の文化や風俗習慣を理解する」「上の人が間違っていたらはっきり指摘する」「対外交渉力の強さ」「人脈の広さ」であった。この調査結果からも多少うかがえることだが、英語ができればグローバル人材ということにはならない。

グローバル人材について研究している早稲田大学政治経済学術院の白木三秀教授の話を読むと、グローバル人材が兼ね備えている資質・能力を4つの因子に分け、その4つの因子がさまざまなパフォーマンスへどう影響するかを調査し、何が重要な因子なのかを調べている。まず、4つの因子とは、「前向き行動力」「異文化適応能力」「仕事能力」「対人関係能力」ということである。そして、この4つの因子の中で最も重要な因子だったのは「前向き行動力」であった。「前向き行動力」とは、挑戦意欲や臨機応変な対応力、決断力、視野・見識の広さなどのコンピテンシー（行動特性）になるということである。

では、学校教育でこの「前向き行動力」を育むためにはどういった学びをさせなくてはならないか。白木氏は「大小さまざまなことに挑戦させ、成功と失敗を積み重ねる中で培われる。そして、結果に関わらず努力のプロセスを評価すること」と話している。また、「英語力はすべてのパフォーマンスの向上に必要不可欠だが、単独では強い影響を及ぼさず、他のコンピテンシーを伴う必要があることがわかった」とも話している。

さて、この「前向きな行動力」だが、実はこれからの教師としての資質・能力にも言えることある。つまり、私たち自身がグローバル人材の資質・能力を備えていないと、生徒への波及効果は得られにくい。これは、白木氏も同じようなことを話していて、これからの教師は、「新しい仕事・挑戦に意欲的であること」「既存のやり方にとらわれず対応する」「新しいことや人との出会いを楽しめること」「想定外の状況でも冷静に対応できること」「まわりから言われることを前向きに受け止めること」など、海外勤務で活躍する日本人の働く姿と、私たち教師の姿をダブらせる。

私も、どこかの海外で働いているような脳でこれからも行動しようと思う。私は、昭和の時代の繰り返しや誰かから言われたようにやることには嫌気がさしている。先生方もこれは昭和のままだなと思うことは違うやり方に見てみる。そのことで学校がおかしくなるという心配はしなくていい。大丈夫だから。それよりも社会が変化しているのに変わらない方が心配である。

そもそも本校のDNAはそういう学校のはずである。